
ポケットモンスターCLOSE

ゲーゲー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターCLOSE

【Nコード】

N64890

【作者名】

グーグー

【あらすじ】

それは…必然だった。

プロローグ（前書き）

初めまして

ポケモン好きがこつじて小説に手をだしました（笑）

最後まで書けるようにがんばります（笑）

プロローグ

それは…

冬が終わりを告げる月…

ある薄暗い満月の夜に生まれた。

それはそれは邪悪なモノで、幸せに暮らしていた人々は村や町に閉じ込められる生活をよぎなくされる。

人々は住処を巨大な塀で囲み、その邪悪なモノの存在から隠れるように暮らし、テレポーターと呼ばれる移動手段を用いて、互いの町や村へ物資の輸出、及び輸入などで生活を支えていた。

もちろん、邪悪なモノに対し討伐を試みたことはある…だが、圧倒的な戦力の前にその戦意は失われ、人々は支配されることに慣れていった。

物語はポケットモンスターの世界、だが、この世界は平和を歪められ閉ざされた失われた世界…。

伝説と呼ばれるポケモンは地を失い、水を枯渇され、空を奪われる…
神と崇められたポケモンは時を止められ、空間を閉ざされ…異世界に封じこまれた…それらを生み出した至高のポケモンは力を奪われ、囚われた。

為したのは人間。

一部の悪しき人間の為、全ての野生のポケモンは人間を嫌い、敵視し、疎み、攻撃を繰り返す…モンスターボールを拒み、進化し、人間を嫌う。

人間と野生のポケモンは仕組まれた原因とは知らず戦い、傷つき、互いを隔離することで干渉をさけていた。

黒の戦いくさと呼ばれる戦いから15年後…暗黒期に一人の少年から…閉ざされた世界が動き出す。

春

何も無いこの世界…周りを見渡せば、高く無機質な壁。

僕が育った世界は、それだけしかない。

他に何も知らない…。

知っているのは空が青くなったり、灰色になったり、赤くなること。

黒になる時が一番嫌い…。

「おーい、リオル！」

振り向くと汗を拭きながら笑顔で走ってくる少年がいた。

あれは僕の友達、名前はサクラ…本人は女の子みたいだと言っては、フルネームで呼ぶと怒る、性格はあんな笑顔だけど短気…でも、すぐに泣くんのだ。

「リオル、テレパシーを使いながらしゃべるのはやめてくれないか、ぜんぶ聴こえてるんだけど」

『ごめん、サク、つつい…』

サクはやれやれといった表情のままリオルを持ち上げた。

フワツとした感覚がイヤなのか、リオルはすぐに手足をバタバタさ

せてはサクを睨んだ。

『やめてよ、もう子供じゃないんだから!』

「…はあ、この短い手足でよくそんなことが言えるな」

上から下、頭から足元までニヤニヤしながら見てくるサクに嫌気がさしたのか、リオルはうんざりしたように視線を落とした。

『もう、今日はなんなの？バトルの授業はもう出たよ?』

「違う違う、今日はハンターが見回りになるんだってよ、一緒に見に行こうよ、この世界を守ってる勇者様だぜ?」

ハンター…この荒廃した世界の守り神、その強さは野生のポケモンを追い払い、退治し、人々の暮らしを守っている者に与えられる称号だ。

教科書にも載っている黒の戦、その時に活躍した集団が枝分かれし、いくつかのギルドに別れているが、その総称としてハンターと呼ばれている。

リオルは少しうつむきながらサクの手を振り払った。

『僕にしたら野生も飼われているポケモンも同じ仲間だよ、いくら人間を攻撃してくるって言ったってさ…』

足元を蹴るそぶりをするリオルに

「…ごめん、リオルにしたらそうだよな」

と、サクはバツの悪そうな顔をしながら、リオルの頭を撫でた。

「でも、あの人達はなんでポケモンと人間が対立するようになったのか調べている人達でもあるんだ、ハンターからは手を出さないし、やり方は乱暴かもだけど、それでも人間とポケモンの未来を真剣に考えてるはずさ」

『…ずるいよ、それは教科書に書いてあること、そのままじゃんか』

リオルは手を上げてサクを叩こうとするが、ひょいっとかわされ、そのまま肩に抱き上げられた。

『ちよ、ちよっと』

「いいからいいから」

そう言うなり、抱き上げたりオルを担ぎ村の入口にあるテレポーターまで走って行く。

テレポーターとは、ケーシーのレポートを利用した、言わば村や町を結ぶ出入口だ。

外の世界ではポケモンは人間を見たら襲いかかってくる、その中で生活を維持する為に作られた。

「あ、もうみんな来てるぞ、リオル！」

肩に担がれ、進行方向とは逆になっているリオルは首を回しながらテレポーターを見ている。

『…みんなハンターが好きなんだね』

「一応な、村に物資やらなんやら持ってくるし、定期的に堀の周りにプラチナスプレーを撒いてくれるし…」

いくらかの距離があつたのか、ハアハアと息を切らしながら人だかりに追いつくなり、サクはその場で呼吸を整えようとリオルを抱えたままうつむく。

すると、奥の人ばかりから歓声が聞こえ、その視線の先には一人のハンターが大量の物資と共に現れた。だが、歓声はざわめきに変わる。

「こんにちは、タウンのみなさん！」

その少女は漆黒の艶のある長めの髪をなびかせ、ニコニコとしながら少し高めの声で挨拶をしてきた。

子供：

女の子？

ハンター？

サクは何も言わず、その少女を人割れした正面から見つめていた。

春 1

「あれがハンター？」

サクはリオルを降ろすと、顔を見合わせた。

周りを見回すが、狐につままれたような顔ばかりが目に入る。

『…もつと悪そうな奴かと思った』

リオルの言葉通り、少女は明朗活発、美しくも強さを漂わせる、そんな印象だった。

「あ、あの、あなたがハンターなんですか？」

声をかけたのは村の長を勤めるサクの兄、名前はユウキ。

15年前のポケモンの襲撃により壊滅しかけた村を立て直し、親の忘れ形見である年の離れた弟を育てた、誰もが認める村の長だ。サクは思春期なのか、最近はろくに話してはいないが、尊敬をしていることに変わりはなく、自慢の兄であり、親代わりの父だと思っている。

「ええ、私がルヴァン諸島、イオリタウンの配属になりましたハンターです！所属ギルドは同じくレクレム、よろしくお願いします！」

少女はかけている黒ぶちのメガネをあげるそぶりをし、そのまま兄の返答をまっていた。

「で…で、な、名前は？」

きゃっ！と、口元に手をあげるそぶりに射ぬかれた青年、少年はいたと思う。

「初めまして…私の名前は、セス。セスと申します」

少女は笑顔で答える、村人も所属ギルドを聞き、通行書を持っているセスに安心したのか、拍手で迎え入れた。

「初めまして、セスさん。イオリタウンへようこそ！私達はあなたを歓迎します。この村に滞在中は私の家をお使いください、愚弟が一人いますが気にせず…」

ユウキはそう言うなり、

「サクラ！サク、こっちへ！」

と、目ざとくサクの名を呼び、手招きをしている。

「サクラって呼ぶな！」

なかばふてくされ顔のまま、人混みを掻き分けて兄の隣へ着く。

「セスさん、弟のサクラです」

女のような名前が気に入らないのか、サクはセスから握手を求められたが、その手を見るままだった。

「…まったく、どこでこうひねくれたんだか、なあ、リオル？」

急なふりに驚いたのか、リオルはサクの服を掴み、顔を隠した。

「あ、あの…よろしく、サクラさん…」

セスは気を利かしたのか、二度目の挨拶をしたが、逆に周りの村人はサクを凝視した。

「俺はサクラじゃなく、サクだ！」

場の空気が静まる中、サクは振り返り、

「まあ、よろしく…」

とだけ言い残して、その場を後にした。

彼は彼なりにハンターに敬意を払っている。

やれやれとユウキはサクの態度に動揺していたセスに耳打ちをする
と、笑顔になり笑いだしたことは今でも村人だけの秘密である。

もつとも、リオルの波動を応用したテレパシーで理解しているサク
が出るに出れない状況だということに、リオル一人は笑っていた。

1

時刻は夜八時。

セスが持ってきた輸入用物資は村人に配られ、他のタウンやシティ

に輸出される荷物は大型のテレポーターへ運び込まれている。

「ユウキさん、荷物はこれで全てですか？」

「ええ、今月の出荷はこれで…あと、これが来月分の…」

と、ユウキは封筒に入れた紙幣をセスへ手渡した。

「…すみません、生活が苦しいのに…ギルドの方には少なくするよう交渉しているのですが…」

申し訳なさそうに封筒をサイドバックに入れると、セスはまたお辞儀をして頭を下げている。

「いや…護衛費と運搬費だと思えば安いもんです。さっ…今日はうちで休んでください」

ユウキはそう言うなり、案内するようなそぶりをみせ、自宅へ招き入れた。

2

「ただいま、サク！」

古い家に響き渡るような大声をユウキが出すと、奥から気だるそうな声が聞こえる。

「おかえり！夕飯、もう出来てるよ！」

ユウキとセスが靴を脱いで入ると、リオルが恥ずかしそうに出迎えた。

「あら、あなたはサクのリオルね…よろしく！」

ユウキとセスに頭をなでられながら、リオルは台所で四苦八苦しているサクの元へ案内をした。

「わあ！すごい！」

セスの第一声に気を良くしたのか、サクは得意そうに料理の説明をしますが、半分くらい聞いたのだろうか、ユウキが止めに入り、皆で食事を始める。

「いただきまーす！と、目の前に用意された料理を頼張り、ふとサクがリオルに目をやりながらセスに問いかけた。

「なあ、セスはポケモンいないのか？ポケモンフードならあるし、食べさせたら？」

「あ、忘れてた！…でも…ちょっと…」

遠慮するように見回すと、

「なんだよ、いるなら出せよ」

と、サクの言葉にびくっとし、うつむいてしまう。

その態度を見たユウキはサクの言葉遣いをたしなめ、

「いいよ、大丈夫、大きかったら外にでも出せばいいし」

と、台所から外へ出れるドアを開けた。

「あ、はい…なら…」

と、セスはモンスターボールを外へ投げた。

光が弾けたと思うやいなや、その光はポケモンを形成するように集まり、その姿を表した。

3

「リザードンか…しかし、あれがモンスターボールなんだな、初めてみた…」

黒の戦から15年、ポケモンは人間を拒み、モンスターボールには入らなくなっていた…

終戦の年に生まれたサクはモンスターボールに馴染みがなく、実物も見たことはない、見たことがあるのは教科書ぐらいだ。

「すみません、せっかく月の光がきれいだったのに…」

セスの言葉に反応したのか、リザードンは尻尾を隠すように座っていた。

「いえ、自家発電じゃ、ここまでの明るさはありませんからね、逆

に過ぎしやすいです」

ユウキは戸棚からポケモンフードを出しながら答えた。

「なあ、なんでセスはモンスターボール持ってんだ？セスも終戦の年に生まれたんだろ？」

リオルと共に、セスに握られたモンスターボールを見つめながら聞くと、意外とは違うが話し出した。

「ハンターになるとね、いくつかのモンスターボールが支給されるの。ポケモンが傷ついたり、瀕死の状態だと連れて帰れないし…その時の為に入れてるんだ、もちろんリザードンは養殖だから入れるんだけどさ」

野生と養殖：二種類のポケモンがいる、養殖とは終戦の年から、それまで人になついていたポケモンにタマゴを生まれさせ、護衛になるよう育てたポケモンである。

なぜだかわからないが、人になつているポケモンはボールに入る、おそらく野生はなんらかの遺伝子を進化させ、モンスターボール特有のプログラムを解除しているのだろうと専門家は考えている。

だが、野生のポケモンを捕まえられるボールはまだ開発されていない。

「サクのリオルも養殖なんですよ？」

「いや、違うよ、こいつは」

なんなけなしに言った言葉だが、セスは呆然としている。

「え？」

「こいつは、タマゴのまま空から降ってきたんだ…んで、孵化して今に至る」

セスはそんなことあるのだろうか、まじまじとリオルを見つめていた。

「ひ、人を襲う？」

その言葉を聞くなり、リオルはポケモンフードを落としながらサクの後ろに隠れた。

「やめてくれないか…こいつが孵化してから、その疑いのせいで何度もイヤなめに合ってるんだ…襲いかかってくるなら、ここにはいないだろ？」

当然と言えば当然だ、セスは悪いことを言ったのだと思い、落ちたポケモンフードを手に載せて、リオルに差し出した。

『…』

一声、かすかに鳴くと、リオルはフードを手にとり食べ始める。

「ごめんね、リオル」

体育座りをくずしたような格好で見つめているセスは、おいしそうに食べているリオルの頭を撫でた。

「気にすんなってよ」

「え？」

「あ…いや、こいつならそう言っただけ」

クスツと笑うと、セスは「そっか」と言い、リザードンの方へ用意されたフードを持っていった。

発電機の音も消え、辺りは静寂に包まれた…塀の外からはホーホーの鳴き声がしきりに聞こえ、野生のポケモンであろう、けたたましい威嚇した鳴き声がふしぶしに聞こえるが…

ぷ…を返せ…

みんな…わ…ているぞ…

おろ…な…んげんよ…とをかえ…

『サ…サク、起きてる？ねえ、また言ってるよ…』

リオルは毛布を被りながら片手を伸ばし、サクの布団をひっぱる。

んぐつと腕を伸ばしたサクは、ぐるりと反転してリオルに顔を向けた。

「ん…なんだあ？」

『また言ってるんだ…外のポケモンが…よく聞こえないけど…今日も怒ってるみたい』

耳をすますと、確かに外からは野生のポケモンの鳴き声がする…

「…?」

『…今日も…昨日もずっと…僕のことなのかな…』

リオルはサクの顔をチラッと見るなり、また布団を被った。

リオルが孵化してから落ち着き、サクと仲良くなるにつれて、毎晩のように外のポケモンから文句を言われている。

人間に味方するな

なぜそこにいる

人間の仲間だ…

サクはリオルを何度も外へ逃がそうとしていた…だが、一度もリオルは外には出なかった…たまりかねたサクは、塀の外へ大声でポケモン達を罵ったことがある。

まあ、破壊光線の嵐がきてからは、お互いに不干渉という掟通り、やめたが…。

「リオル、あいつらは仲間じゃない…仲間なら受け入れてくれるだろ？人間だってそうさ、受け入れてくれなきゃ、そんな奴は仲間じゃない…リオルの仲間は受け入れてくれた、この村の人達だよ」

サクはそう言うなり、リオルの頭を布団越しに撫でると、そのまま深い眠りについた。

時刻は深夜、2時。

突然の轟音と共に全てが始まる。

最初に飛び起きたのはリオル、続いてサク…。

二人は顔を見合わせるなり、叫び声が聞こえる外へ飛び出した。

「なんだ！どうした！」

裸足のまま外へ飛び出すと、飛び込んできた視界を信じることはできなかった。

月明かりが照らす静寂な夜は失われて、炎から逃げ回る人々、そしてポケモンと共に戦う人…これはいつたい…

『塀が壊されてる！』

リオルの言葉に視線を向けると、東側の塀が壊され、次々と野生のポケモンが侵入してきた。

「こ、こんな…リオル、兄貴はどこかわかるか？」

『や、やってみる！』

そう言うなり、リオルは目を閉じて、兄であるユウキの波動を探る。本来、波動とは生きとし生けるもの全てにある鼓動のようなものだ…

『正門のところ、セスもいる!』

「行くぞ!」

二人は炎や瓦礫を避けながら正門へ向かった。
時刻は深夜二時…

3

「兄貴、どうなってんだ!」

サクは遠目でユウキを確認するなり、大声を張り上げた。

「サク、お前は逃げろ!」

「え?」

手を大きく横に降るユウキに、なんらかのポケモンの技が直撃し、
後方へ飛ばされたのがわかった。

「兄貴!」

ようやくユウキの場所に着くなり、サクは血だらけの兄を見つめて
呆然とする。

「逃げる…こ…こは…」

と、痛々しい声が響く

「り、リオル！」

振り向くなり、そこには吹き飛ばされたリオルが倒れていた。

「な、なんだってんだ！」

「さ、さく…逃げろ、リオルを連れて逃げろ…」

「で、でも…」

「いいから！…サク、リオルを、俺達の弟を頼んだぞ、二人で…」

「兄貴！」

と、その瞬間、サクとリオルの周りに光が集まる…

ケーシー…

「…プレートを守れ」

え…

「あ…兄貴！」

光がサクの体を圧迫する…テレポート、ふいにそう思い振り返ると、
そこには…

炎上する瓦礫の上にセスがいた。

炎に舞い降りた天使…

ここから始まる、閉ざされた世界に一つのヒビが刻まれた…。

春 2 (後書き)

急展開でした。

ここからは旅かなあとか、謎の部分にふれては離れ、そんな感じ)
笑)

よろしくお願いします。

気がつけば…

1

風が吹いている…春の季節には色々な生命の輝きを感じる。
深緑に染まる草木、そこに流れる優しい風…なによりも何かが始まる予感、暖かい陽の光にサクはゆっくりと目を開けた。

「…」

ここはどこだろう…見上げ見える大きな木、暖かい風が頬をさす。しばし見上げる深緑の木々は揺れ、サクは葉を見つめながら思い出していた。

「兄貴…」

リオル…

「リオル！」

思い出したように飛び起ると、サクは辺りを見回した。
遺跡だろうか、崩れた壁や倒木、森の中だろうか、少し拓けている。と、倒木に寄りかかっているリオルを見つけた。
サクはよれる足を踏ん張り、リオルの元へ這うように急ぐ。

「リオル、おい、リオル！」

抱き抱えるが返事はない、と、自分の手の平がぬるっとなっていたの

に気づく。

「血…血…」

リオルの背を見ると、皮膚は剥がれ、出血していた。

「なんで…こんな…」

リオルはなんらかの攻撃を後方から受け、倒れていた…
そして…そして…

「くそっ！」

サクはリオルを抱えるなり、森の出口であろう場所を探すが見当たらない、火傷をおったリオル…早く手当てしなければ死んでしまう。

「ここはどこなんだ…テレポーターならどこかのタウンかシティの
はず、でも…ここは…」

やばい…リオル…くそ…

「くそー！…！…！」

サクは叫ぶなり片足をついた。

誰…

「！？」

「誰なの？」

「誰かいるのか！」

サクは辺りを見回すが姿は見えない。

「誰か…いるなら助けてくれ！ポケモンが…リオルが死にそうなんだ！誰か！」

待ってて！

そう聞こえると、ゴトつと重い音が聞こえた。
見渡すと、倒木の横にある遺跡の一部が蓋のように持ち上がった。

「ねえ、早くきて！」

と、地面の中から一人の女の子が手招きしている。

あっけにとられているサクは、ようやく事態を飲み込んだのか、少女が現れた地下へリオルを抱き抱えて入って行った。

2

あれからどのくらいの時間が過ぎたのだろうか、サクは今、拘束されていた。

あの時、地下へ入るなりリオルを引き離され、サクは数人の大人たち拘束され暗い部屋へ押し込まれた。

「ここは…なんなんだ…リオルは無事だろうか」

椅子に座るサクはリオルの無事を願い、再び大声で名を呼び、ドアを叩く。
数分だろうか、足音が聞こえたと思うやいなや「出る！」と、監視窓のようなものが開く。
オートロックのようなドアが開くと、まぶしいかぎりの光が視界に入り、目を細める。

「早くこい…」

視力が戻らないのか、サクは肩を抱かれるように進まされた。

数十メートルだろうか、突き当たりのドアの前まで連れてこられると、

「連れてきました」

横に立っていた男が言うなり、ドアは開いた。

サクは注意深く部屋を探ると、大きなソファアームに老人、そして招き入れた少女が緊張した顔を見せながら、サクを見つめていた。

「まず、私達の紹介から始めようか…」

老人は長い髭を擦りながら話し出す。

「ここはポケモンレンジャー…の、夢の跡だ」

「…レンジャー？」

聞いたことがある、黒の戦の前まで平和を守っていた部隊…。

「ポケモンの味方をして壊滅させられた…」

サクは必死に教科書を思い出していた。

「突然のポケモン達の凶行…そして、人間を守るべきレンジャーはポケモンの味方をし…」

「突如現れたハンターたちにより、多くのポケモンの命が奪われ、我々も敗北し、壊滅させられた」

「レンジャー…」

そうだ…こいつらが…

「あんたらが…俺の親を見殺しにした」

サクは視線を変えず、老人を直視しながら答えた。

「違う！」

ふと視線をずらすと、先ほどの少女が真っ赤な顔をして叫んでいた。

「理由があるはずなの！ポケモンがそんな…急に人を襲うなんて…」

「違う…あなた達がポケモンの味方をしてハンターと争った時に、俺の親は巻き込まれて死んだ」

「…っ」

「それは事実だ…理由なんてどうでもいい、ここがレンジャーの集まりだろうがなんだろうが、昔のことをガタガタ言うつもりもないし、ポケモンだって嫌いじゃない……」

リオルはどこだ？

サクはそう言うなり、辺りを見回す。

「…リオルはまだ治療中じゃ、ゆっくりしていけばいい」

「おじいちゃん！」

少女は肩を掴むが、老人は何も言わず黙っていた。

「ここは安全じゃ、外に出なければ何も起こらない…部屋も服も用意しよう…」

服と言われ、サクは自分の姿を思い出した。破れたシャツとズボン、裸足…

「…なんでそこまで？」

「こちらの勝手な罪滅ぼしだ…それに君は本当にリオルを心配しておる、それだけではダメかな？」

老人はそういつと部下であろう者に目配せをし、サクを部屋へ案内させた。

先ほどの部屋とは違い、新しい布団には着替えと靴が置いてある…

サクはベッドに座ると静かに目を閉じていた。

3

「入るよ?」

時刻は午後五時…おそろく、あの時から1日は過ぎている。

サクは手元の時計を見ながら、

「どつぞ…」

と、答えた。

すると、ゆっくりとドアが開き、さきほどの少女がご飯を持ちながら現れた。

「これ…夕飯、ここに置いておくね」

少女は隅にあるテーブルに置くと、サクの方をじっと見ていた。

「聞かないのか?なんで俺が外にいて、リオルが瀕死になっていたか?顔が聞きたそうだぞ?」

「ううん…おじいちゃんがみんなに詮索するなって…言ったし…あ、リオルも、もうすぐ良くなるって」

ほんとか?

サクは立ち上がり、少女に確かめるように揺さぶった。

「ちよ、な、なに、ほんとだって!」

そっか…

「そっか…よかったあ…」

と、少女は急に泣きながら喜んでいるサクにびっくりしながらも、

「そんな顔もできるだ」

と、クスッと笑いながら口元を押さえていた。

「な、そりゃ…あいつは弟みたいなもんだし…ありがとう…ほんとに…あ、君の名前は?」

サクはよつやく少女の肩を離すと、鼻をすすりながら聞いた。

「私の名前はナオ、えっと…名前ぐらいなら聞いてもいいかな?」

「俺はサク…ナオ、ありがとう」

純粹な笑顔に少し照れながら、お礼ならメディカルセンターの先生にと少しハニカミながら答えた。

「あの、リオルのところに行きたいんだけど…案内してもらえるかな?」

「うん、ただ、まだ治療中だし…まずは夕飯を食べて？それから連れてくよ」

「わかった！」

サクは早く会いたい気持ちからか、急いで食べては喉につまらす、そんな光景をみながらナオは微笑んでいた。

5

「先生、ありがとう！」

横になつてしているリオルの前いる先生に一礼すると、サクはリオルの頭をなでながら何度もお礼の言葉を述べていた。

「いや、あと少し遅かったら危ないところだったよ…しかし、頑丈なポケモンにこれほどダメージを与えろとは、いったいどんなことがあつたんだい？」

先生は聞いてからしまったと言わんばかりに、あの老人や周りの人を見回した。

サクはそんな空気を察したのか、ゆっくりと覚えていることを話し始める。

少し話したところでナオが泣いているのに気付いた…。

「…んで、ここにいた…」

「そんなことがあったのか…」

老人の名はロックハート、15年前までは部隊の隊長をしていたらしい。

「はい、それで兄貴はプレートを守れって…」

プレートという単語を聞くなり、ロックハートは目を見開き、うーんと唸りながら髭を擦った。

「…君には知る権利があるかもしれん…」

「おじいちゃん…」

ナオはそつと手をかけると、ロックハートは話しを続けた。

周りの部下や先生も黙ってロックハートの言葉を待っているようだ。

「何事にも原因がある…単刀直入に言おう、プレートとはおそらく、アルセウスが持つ17のプレートだろう…」

その昔、アルセウスは己が持つ17の属性のプレートからポケモンを創造したと言われている。そのプレートが持つ力は強大で、荒れ果てた土地ですら瞬時に草木が生まれ、水が湧くとされる。だが、15年前に異変が起こった…

「異変？」

アルセウスが消えた…

この世界は原初となるプレートの力を借りて成り立っており…その

力を持つアルセウスが消え、伝説や幻と呼ばれるプレート之力を濃く受け継いだポケモンは力を失った…そして、野生のポケモン達は立ち上がり、アルセウス、そしてプレートを奪還しようとしたのじや。

「…誰から？」

アルセウスを何らかの形で封印し、プレートの力を利用した者がおる。

「…」

一部の悪しき人間。

「ハンターじゃ」

…っ！！！！！！

「どづいつことですか！」

サクは口を開けたまま呆然としている。

今までの常識はなんだったのだろうか…いや、この話しを信じるベきなのか、そうではないのか…。

「わからん…だが、テレパシーでポケモンから直接聞いたんじゃ…アルセウスが囚われ、プレートの力が悪用されている…とな」

アルセウスとはつまりは創造主…神を侮辱し、あまつさえ力を悪用する人の心に対し、ポケモン達は人間に見切りをつけたのだろう。一部の人間とそれに準ずるポケモンからプレートの力を感じとり、

その相手がハンターの中にいた。

疑うにはそれ以上のことはない。

「……」

「私のお父さんが聞いたの、ポケモンから……だから、お父さんはハンターからアルセウスとプレートを……」

ナオはぎゅーっと手を握り、ふるふると肩を揺らしていた。

「だけど、無理だった……人間とポケモンの間に入ったお父さんは戦いの中で行方不明……」

「な、ならみんなにこのことを話して……」

「ダメよ！誰も信じてくれない……ハンターは世界を守っている勇者だもの……」

教科書通りだった……その事実には証拠はない……だが、サクの心は少しづつ動かされていた。

「……ハンターの中にプレートの力を持つ者がいる……目的はわからないが、そいつらが戦いの原因を作った……」

「うん……」

サクは兄の顔を思い出す……弟を頼む、そして……プレートを守れ……

「……信じるよ、兄貴が言った言葉もある……何より、ナオは良い奴だ……」

と思うし」

サク…

ナオはサクの手を取った。

「力を貸して…私達だって何年も地下に逃げてたわけじゃないの…
プレート場所は三つにわけられてる、そうポケモン達が言ってる、
一つはカントー、そしてシンオウ、イツシュ…この場所のどこかに
プレートは存在する…お願い、力を貸して！」

サクは気持ち良さそうに眠っているリオルを見ると、深く、そして
強くうなずいた。

バトル(前書き)

点数としては30点ぐらいの小説かもしれない…でも、完結目指します。

バトル

1

「明日はカントーだね、サク」

食堂で話しかけてきたナオに、サクのかわりに軽くうなずくリオルは緊張した顔をサクへ向けた。

「…大丈夫だよ、リオル、平気平気」

サクはリオルの頭をポンと撫でると、安心しかたのように嬉しそうにポケモンフードを食べていた。

「ところでさ、サクはバトルはしたことあるの？リオルとさ？」

「うーん、バトルは授業で少ししたぐらいかなあ、ポケモンもつてる奴も少ないし…あんまり自信はないよ、負けたことはないけど…」

「なら、俺とするか？」

急に声をかけられ、ビクつとしながら振り向くと、そこには坊主頭の勝気そつな男が立っていた。歳は自分より少し上だろうか…そんなことを思っていると、男はサクの隣に座ってきた。

「俺の名前はバグ、お前とナオと三人で動くことになる…」

「よろしく…」

ぶつきらばつに答えるサクにイラツとしたのか、バグはそのまま話し始めた。

「…勝手なことをされちゃ困るからな、リーダーを決めようと思う。各地にある俺らの施設を経由して、プレートを持つハンターからプレートを奪還するのが任務だ…素人と一緒に行動して、ハマするのはさけない」

バグは語尾を強めながら捲し立てると、サクの顔をじっと見ている。

「で、実力がみたいわけか…おもしろい、やるぜ、勝ったらリーダーなんだな？」

「ああ、話が早くて助かる、飯食べたらホールで待ってる」

そう言うなり、バグはあまり手付かずの昼食を片付けてさっさと食堂を出て行ってしまった。

「ねえ、大丈夫？あいつ、性格悪いけど、、、バトルは強いよ？」

ナオは心配そうに声をかけてくるが、サクは目の前のフライドチキンをおいしそうにほうばり、大丈夫、とだけ言うと水を飲み干していた。

「リオルは強いよ、たぶん、ボケっつとしてなきやね」

ニヤリツと笑うサクに、リオルはふうふうとため息をついた。

「ほんと？」

「こいつは強い…けど…バトルは嫌いなんだ、だから負けたことはない！」

「それって…」

2

「それでは…ルールは1対1の時間無制限」

ナオがホールの中央に立ち、左手をあげた。

「よお、逃げずにきたようだな！」

「ああ、当然だ」

左右に別れた二人は軽く言葉をかわした。

「それでは…始め！」

ナオは左手を大きく下げた。

「いけ、ギャラドス！」

そう叫ぶと、バグはモンスターボールをコート中央へ投げつけた。光がはじけ、ポケモンの形を形成していく。

「リオル、頼んだぞ！」

と、リオルはスタスタとコート中央へ歩き始めた。

ギャラドスは大きな目でいかくし、巨大な尻尾で地面を叩いている。

「ギャラドス、アクアター…」

「リオル、戦闘不能！よつて、バグの勝利？」

まったく状況が掴めない、審判のナオですたら、本当に戦闘不能なのか…ただみんなして口を開いていた。

「やっぱし…リオル、戻れ」

サクが叫ぶと、リオルはすくつと立ち上がり、嬉しそうにサクの元へ走りだした。

あの時、コート中央に着くなり、リオルはギャラドスとにらみ合いをしたのち、勝手に後ろに倒れた。

「ちょ…お前、やる気あんのかよ！」

「…」

「バグは唾然としたギャラドスの隣まで走りだすと、両手を広げてジェスチャーしている」

「んー、痛いのがイヤだし、あいつ強そうなんだもん…」

「はあ？」

「って、リオルが言ってる」

サクは自分の後ろに隠れているリオルに困惑したように答えた。

「言葉って…ポケモンの言葉なんかわかるわけねーだろ！」

「こいつだけはわかるんだからしょうがないだろ！」

サクはイラだつバグに対して、なかばあきらめモードのまま答える
と、

「ちっ、興ざめだ。明日、遅刻すんなよ」

そう言い残して、ギャラドスをボールにしまつと、すぐにホールから出ていった。

数人いたギャララーも続いて出ていく。

「ね、ねえ…負けたことないって、バトルするけど、戦って負けたとかじゃない、ぜんぶ降参してたの〜？」

「…ああ、こいつは臆病だし…ケンカが嫌いなんだ、だからバトルもみんな降参…偉そうだけどな」

サクはクスッと笑つとばつの悪そうなりオルを抱えてナオを見つめた。

「別に一緒に行動しなくてもいいよ、目的が同じなら…あいつもうるさそうだし、迷惑もかけるつもりもないし」

「で、でもバトルが出来ないと…外に出るのも危ないのよ？ねえ、

リオル、バトルしょ？」

ナオは抱えられた顔を覗こうとするがリオルは顔を隠す。

「…怖いし、痛いのはイヤだったよ」

「え…本当にリオルが言ってるの？テレパシーなら私にも聞こえるんだけど…」

「こいつは…器用なんだ、テレパシーなんかないよ。ただ、俺とリオルの波動がまったく同じなんだ…だから共鳴させて言葉をかわしてる、他には聞こえないよ」

ポンポンと背中を撫でると、サクはそのままホールを後にした。

「波動の共鳴…二人だけの言葉…話しを聞く限り、強そうね」

ナオはあきれ顔のまま深くため息をついた。

3

『サク、ごめんね』

リオルは隣で地図を広げているサクを見上げた。

「気にすんなって、いつものことじゃん」

『でも…サクはハゲに文句言われてたし…戦えばよかったのかな？』

「いいよ、戦いたくないなら、そんなやらなくていい…」

『でも…』

「昔な…」

サクは地図をたたむと床に座り、リオルを覗きこんだ。

「昔、イツシュ地方にNって奴がいたらしいんだ…」

そいつは、ポケモンを人間から解放する為に戦った。ポケモンは人間の道具じゃない、まして意思とは関係なく戦わせるなんて…

『その人、どうなったの？』

「少しやり方が強引で…ブラックってやつとの戦いにやぶれて消えた」

でも…俺は言いたいことはわかる気がするんだ…強いポケモンを育て、戦わせる…それが当然だった。でも、弱いポケモンは育てもしないで、モンスターボールに入れたまま…だんだん人間のエゴが強まったんだと思う。

なかにはお互いに信頼しあってるトレーナーとポケモンもいたかもしれない、でもな…

「なんかな…そんな世界はなくなってもよかったのかなって…歴史の本を見ながら思った。だから、リオルが強くて弱くてもいいし、バトルがイヤならやらなくていいよ…戦うべき時に戦えば、その時は俺もサポートするし」

ふふつとサクはリオルの顔を見る。

『…戦うべき時に戦うか…』

「ああ、その時まで負けてたつていいんだ」

なんか変なのつとリオルは笑いながらうなずいている。

「なんだかな、Nって人とは話したかったかも…」

サクはもう一度地図を開くと、イツシュ地方を見ていた。

4

夕食の為にサクは食堂に行くと、そこには誰が録画したのか、先ほどのバトルの映像が流れ、何人もの人が指をさしてわらっていた。

「なんだこれ…」

サクは中央にうつしだされた動画を見ながら周りを見回すと、一人の男が近づいてきて、いきなりサクを突き飛ばした。

「な、なんだよ！」

「大事な任務にお前みたいな弱い奴が選ばれるなんてな！」

男は自分はAクラスの実力があると豪語し、話しを続けた。

「この世界の命運はバグ隊長とナオさん、俺が適任だ。お前はおとなしくここで待ってるよ」

「…別に俺はリオルと一緒に動くからいい、勝手にしろよ」

サクは無視するようにリオルの手を引いて進もうとするが、とりまきの数人が道をふさいだ。

「そんな弱腰だから村をやきつくされんだよ、お前、村を見捨てて、そこの小さいのと逃げてきたんだろ？」

「…」

「何が運命の子だよ、じいさんもボケたんじゃないのか？腰抜けはここで隠れてればいい…まあ、カントーに行ったとしても、バグ隊長やナオさんを見捨てて逃げるんだろ、さっきのバトルみたいに…お前の兄貴もかわいそうだな」

と、途端にリオルが一步前に進み、いかくを始めた。

「なんだ？やんのかよ？」

「…」

サクは無言のままリオルの後ろ姿を見ている。

「はっ、やっぱりやらねーじゃん、腰抜け」

男は周りのとりまきに笑うような目線を送っていた。

「…いいよ、やるよ、バトルだろ？」

「は？」

「俺とリオルの兄貴をバカにするな…やってやるよ」

そう言うなり、サクは引き返し、ホールへ男を誘った。

「すかしゃがって…そういう態度がむかつくんだよ！」

男はとりまきと共に後に続く。

『…あいつ、許せない…』

「そつだな…戦うべきに戦うか…」

『うん…なんだろう…あいつの言葉を聞いていたら…胸が苦しくなる…』

時刻は午後7時…

サクとリオルはコートの前にはいた。

よわっちい奴が強いわけ

1

「行くぞ！」

男はモンスターボールを投げた。

一呼吸ぐらいだろうか、モンスターボールから放電のような現象が起こる。

「全てを焦がせ…エレキブル！」

放電現象を起こしながら、エレキブルは両手に握られた電気の球体を握りつぶす。

「リオル、見せてやれ、お前の力を！」

サクがそう叫ぶと、リオルは大きく弧を描くようにジャンプし、コート中央に着地した。

バトルだ!!!

「エレキブル、ほのうのパンチ！」

先手をとったのはエレキブル、勢いよく右手を炎に包ませるなり、

リオルに向かって突進してきた。

「リオル…」

『わかった!』

むろん、二人の会話は誰にも聞こえない。

リオルはその場で二、三回の足踏みをする、その姿を消した。

「なっ!」

「リオル、インファイト!」

サクがそう叫ぶなり、エレキブルの後ろに現れた。

「…神速か!」

エレキブルが振り向くと、そこにはリオルの拳が迫っていた。

「エレキブル、ガードしながら離れる!」

男が叫ぶ前にリオルの拳がエレキブルにヒットした。

体制をくずしながらも、ほのおのパンチをかすらせると、そのままリオルも体制をくずし、互いに間合いをとる。

「そもそも…リオルが神速やインファイトが使えるのか?」

男は顎に手をこすりつけるなり、

「エレキブル、じしん!」

「リオル、じしんで迎え撃て！」

互いに力を込め、足を大きく踏み込んだ。互いの衝撃波は地面をつたい、大きくコートが盛り上がる。

その衝撃からか、リオルは後ろに吹き飛ばされ、エレキブルは体制を崩し、片足をつく。

「リオル……………波動弾！」

サクの指示に周りのギャラリーはざわめきだし、その視線を向けられた。

リオルは空中で体制を立て直すと、両手を前に出し、青白い光が集まる。

「ふざけるな、波動弾はルカリオにならなきゃ覚えられん！エレキブル、カミナリで決めろ！」

エレキブルは身体中の電気が放電を起こし、そのパワーが集まる刹那…リオルの波動弾ができあがる。

「リオル！」

「エレキブル、かみなり！」

早いつ……………！！！！！！

リオルの頭上に光が落ちる。
けたたましい轟音が響く中、放電が放電を繰り返し、ようやくコー
トの中央にリオルが倒れているのが確認できた。

「…終わりだな」

男はニヤニヤと笑うなり、倒れているリオルを指差した。

2

「リオル…リオルー！！！！」

サクは倒れてるリオルに叫ぶ。

「もう終りだ！」

審判がバトル終了の声を出そうとすると、ボゴっという鈍い音が響く

「なっ…！」

なんとリオルはエレキブルの後方へ姿を現した。

「なんだと！」

男はエレキブルの足元に開いた穴を見つける。

おかしい…リオルはあそこに…

と、リオルが倒れている場所に視線を向けるが、残像のように消え

ていく。

「リオル、ゼロ距離から波動弾を撃ち込め！」

リオルは片手にある球体を押しつけるように、振り替えようとしているエレキブルの横顔に命中させた。

「っ！エレキブル、耐えろ！」

「リオル、そのまま押しきれー！！！！！」

エレキブルはリオルの片手を掴み、リオルはその腕を伸ばそうとしている。

「いつけー！」

その声をあげると、エレキブルの体は持ち上がり、スローモーションのように後方へ吹き飛んだ。

「リオル、そのまま気合い玉を撃ち込め！」

吹き飛び仰向けのエレキブルの視線の先には、大きな球体を両手を伸ばして作りあげたりオルがいた。

「よけるー！」

男が指示を出した瞬間、エレキブルの体はコートにめり込み、バトル終了の合図が告げられた。

「ふ、ふざけるな！あんなに早く…」

男は口ごもるやいなや、リオルを指差す。

「あんな多くの指示、どうやったんだ…何で波動弾が使えるんだよ
」！

…。

「こいつは、ただ波動弾が使えるリオルただけだ…何で使えるかな
んて、知らないよ」

サクはリオルを抱き抱えて男を直視した。

「俺はこいつと波動を使って話せる、その分、先の行動を指示して
ただけ…」

と、静まりかえったホールにバグの声が響いた。

「…ほんとに話せるのか？」

「バグ隊長！」

男は振り向くと、そのまま一步後退した。

「最初から言ってるだろ、話せるって」

「確かに…話してもしなきゃ…あそこまで動けないな…みがわりからあなを掘る、そして波動弾…イチ、お前の敗けだ」

イチと呼ばれた男は無言のままエレキブルをボールにしまうと、キツとサクを睨み付けホールから出ていく。

「他の奴も持ち場に戻れ！もう休憩は終わってるぞ！」

一喝するなり、ギャラリーは互いに言葉を興奮しながらも交換し、ホールを後にする。

残されたサク、バグ、ナオはコート中央に集まっていた。

「し、信じらんない！あ、あんなに強かったの？」

ナオは興奮しているのか、ところどころかみながら言ったり、リオルを抱っこした。

「てんで弱虫かと思ってたよ…ごめんね、リオル」

抱っこされたのが恥ずかしいのか、リオルは両手でナオの顔を遠ざけようとしている。

「…何で俺とはバトルしなかったんだ？」

「……………」

「ポケモンは道具じゃない…戦うべき時に戦い、守るべき時に守ればいい、人間のエゴで戦わせるのは好きじゃないし…こいつも望んでいない」

サクはリオルを見ながら小さく呟いた。

「ポケモンと人間は対等だ…意思を尊重し、互いに尊敬し、共存するべき生命だ…」

バグの言葉に顔を上げると、

「Nの願い…そうだろ？」

「…弱いポケモン、強いポケモン、そんなことは関係ない…持っているポケモンはみな等しく、愛され、愛するべき存在…けして、人間だけがどうこうできるものじゃない…全ては等しく、寄り添うべき生命…」

サクは思い出すようにつぶやく…いつしかリオル、ナオも聞き入っている。

「守られるべきは互いの意思…」

「告げられるものは互いの信念…」

静寂が包み込む。

「全ては互いの意思の元に…」

サクはリオルを抱き抱えて、コートを後にした。

「強さってなんだろう、バグ…」

「…わからん、ただ相手の思いに答えることが、強さにつながるんだろう…あいつらみたく」

「N…どこにいるんだろうね？」

ナオはうつむきながら独り言のように言い、そのままホールを出ていった。

「俺が聞きたいよ、そんなん…」

バグは一人、手を握りながら立っていた。

よわっちい奴が強いわけ(後書き)

とりあえず最初のバトル終了っす。あらためて読むと、ほんと汚い文字の羅列(笑)

Nについてはまだまだシークレットです(笑)

サク

「Nファンに怒られる」

リオル

『怒られる!』

作者

「ごめんなさい(笑)」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6489o/>

ポケットモンスター-CLOSE

2011年1月16日05時48分発行